

国民国家形成と〈青年〉試論

男性史研究の視点から

Formation of Nation-State and “Seinen (Young Man)” :
From the Perspective of Masculinity History Research

KATO Chikako

加藤千香子

はじめに

本稿は、ジェンダー史研究としての男性史（男性性の歴史）研究の方法をふまえながら、近代において構築される〈青年〉に注目して、近代日本の国民国家形成および戦後日本の国民国家再興期をめぐる新たな見方を提起しようとするものである。

本論に入る前にまず、筆者が方法とするジェンダー史研究について述べておきたい。日本の歴史学で「ジェンダー」が意識されるようになったのは、ジョーン・W. スコットの著作『ジェンダーと歴史学』の翻訳出版⁽¹⁾によるところが大きい。スコットが提起したのは、アカデミズムの中で周縁化されてきた女性史のラディカルさを発揮させ、歴史の書き直しに着手するための方法であった。スコットは、「女」を特殊なものとして傍流に置くのではなく、「いかにして政治がジェンダーを形づくり、ジェンダーが政治を形づくるかを分析」することが重要であると説く。「ジェンダー」の視点とは、単に既存の歴史に新たに女を加えるにとどまらず、「政治」すなわち歴史の捉え方に再考を迫るラディカルなものであり、問題とされることとなったのは、歴史的に構築される「女性性（女らしさ）」「男性性（男らしさ）」であった。

ジェンダー史は、女性の問題だけでなく歴史の中で主流の位置におかれた男性の対象化にも向かった。ドイツ社会史研究者であるウーテ・フレーフェルトは「最良の意味で革新的であり、かつ従来の歴史学に対する反乱となりうるのは、ジェンダーの歴史の問題意識を研ぎ澄まして男性性に向けることである」と述べる⁽²⁾。この視点は、歴史学で「主体」と見なされてきた「人民」「民衆」なるものが実際には「男」のみを指すものであったことを暴くこととなる。

ドイツ近代史研究者であるジョージ・L・モッセは、特に近代的な男性性の分析の必要性について次のように述べている。

男らしさの理想は十分に表舞台の中心を占めるに値するものだ。なぜなら、それは国家的独立性、市民的価値観、戦争といった観念を形成するのに、決定的な役割を果たしていたからだけではなく、近代の歴史のほとんどすべての局面に存在し、影響を及ぼしていたからである。近代的な男性性は、固有の意義を持った一つの歴史的な現象として分析されなければならない⁽³⁾（傍点は筆者、以下同）。

モッセは、このように近代の歴史のすべての局面において「男らしさの理想」やステレオタイプが存在し影響を及ぼしたことに注意を喚起する。また同時に、「近代的な男性性」が「まさに社会の理想と希望を反映したものであるように、その敵は社会の敵」とされ、「標準的な社会を強化する務めを果たした」ことに注意を向けている。近代の歴史の局面に存在する男性性を分析することは、見逃されていた「標準的な社会」がはらむ他者の排除や抑圧の問題を浮かび上がらせるものとなるのである。

こうした男性史の視点に立つ歴史研究は、日本ではまだ限られているとはいえ実証的な成果も見られるようになってきている。日本近現代史で代表的なものとして、近代日本の少年少女雑誌を対象に、描かれた少年の表象から男性性に潜む「ウィークネス・フォビア」(弱さ嫌悪)の問題を論じた内田雅克⁽⁴⁾、デモクラシー運動の文脈で捉えられてきた大正期の都市民衆暴動を男性性と暴力の視点から捉え直す藤野裕子の研究⁽⁵⁾などがある。いずれも、既存の歴史学の見方に修正を迫る視点を提起している。筆者もこれまで1900～1920年代を中心にジェンダー史のなかで男性史を意識した研究を行ってきたが、今後はパースペクティブを広げ戦後史をも視野に入れながら、日本近現代史の再考を進めたいと考えている。本稿はそのための試論である。

本稿で対象とするのは、〈青年〉という概念の歴史的構築過程である。〈青年〉は、モッセの提起する「男らしさの理想」としての「近代的な男性性」の典型とみなすことができる。通常用語としての「青年」は、10代半ばから20代にかけての年齢層を指すカテゴリーであるが、〈青年〉というカテゴリーは、「近代」に特有の現象である。ドイツ近代史研究では青年世代や青年運動に関する歴史研究の蓄積があるが、それらを見ると、1890年代のヴァンダーフォーゲル運動や青少年政策のなかで「青年世代」が「発見」されるとともに、〈青年〉概念が「ロマン主義的な美的観念として社会に浸透」し、「我らとともに新しい時代が始まる」という言葉に示されるような、〈青年〉こそが時代を切り拓く者であるとする〈青年〉神話を生んだことが明らかにされている。この〈青年〉神話は「男らしさの理想」と切り離すことはできず、それを検証するにあたっては男性性の観点からの分析が欠かせない。

ここで日本近代史に目を転じると、〈青年〉概念の構築に注目した研究として代表的な歴史研究では、木村直恵『〈青年〉の誕生』⁽⁶⁾、多仁照廣『青年の世紀』⁽⁷⁾があげられよう⁽⁸⁾。木村は、明治20年代—1880年代後半における新しい政治的「実践」主体としての〈青年〉を対象とし、多仁は「日本の十九世紀末に『若者』から区別して誕生した『青年』が、二十世紀を通じてどのように概念を拡張させ、変化し、そして失われようとしているかを示す」⁽⁹⁾ことを課題とし、地域と関わる青年団に焦点をあてて論じている。これらの研究ではいずれも、「『青年』の誕生」という表現が使われ、確かに〈青年〉を近代の構築物とみなす理解がある。しかし、本論で検証されている内容を見ると、主題とされるのは青年の活動や組織化についてであり、そこでは〈青年〉を「時代を担い進める」主体とみなす本質主義的な理解が前提とされており、〈青年〉神話を問うまですべてに達していない。

本稿で意図するのは、〈青年〉が近代に誕生した概念であることを前提とするにとどまらず、〈青年〉を「時代を担い進める」者として特別な存在とみなす「神話化」がなされたことに追究の眼を向け、問題化、対象化することである。〈青年〉の神話化は男性性と不可分であり、そこに検証の眼を向けることは、見えなくされてきた他者の抑圧・排除やミソジニーといった問題を暴き出すこ

とつながると考える。

本稿では、19世紀末の国民国家形成期から戦後国民国家再興期の1950年代までを対象とし、時期区分としては国民国家形成の諸段階を踏まえて論述する。構成は以下の二部構成をとる。Ⅰでは、近代日本の国民国家形成と深く関わる「男らしさの理想」としての〈青年〉の特質とその変容について、これまでに発表したいくつかの拙稿に依拠しながら概観し、Ⅱでは大日本帝国崩壊後の国民国家再興過程とかかわる〈青年〉と男性性をめぐる動きとその再構築——新たな〈青年〉神話の成立の問題——を考えていく。

なお、対象とする時期を広くとり、その中で国民国家形成との関連で注目される事項に焦点を縮めて論述することを重視したため、対象とする事例が限定的にならざるを得なかったことを最初にお断りしておきたい。

Ⅰ 近代日本の国民国家形成と〈青年〉・男性性

最初に、近代日本で〈青年〉神話が誕生したと見られる明治20年代に〈青年〉への呼びかけを始めた徳富蘇峰と山本瀧之介という二人の論者を取り上げることとする。そのうえで、彼らによって喚起された〈青年〉と男性性が、近代日本の国民国家形成および帝国化の過程とどのようにかわったのか、さらに「新時代」と認識された第一次世界大戦後～1920年代における〈青年〉への呼びかけや男性性の変容についても考察していきたい。

1 「新日本」と「帝国」の〈青年〉と男性性——徳富蘇峰の〈青年〉論

日本で「青年」という言葉の成立は、Young Men's Christian Association (YMCA) の訳語として1880(明治13)年に小崎弘道が使った「基督教青年会」に求められている⁽¹⁰⁾。木村直恵は、自由民権運動が退潮し明治政府の下で政治体制が確立されていく明治20年代に、「『青年』という言葉が期待と称揚の念をこめて新しい世代として措定され、流通するとともに、この言葉のうちに自らのアイデンティティを見出す膨大な量にのぼる若者が出現」したと述べる⁽¹¹⁾。

当時の〈青年〉に対する呼びかけの代表として、雑誌『国民之友』の社長兼編集長であった徳富蘇峰⁽¹²⁾があげられる。彼の『新日本之青年』(1889(明治20)年)は、同時代の人々に大きな影響を与えるものであった。同書で徳富は、「青年ハ社会運動ノ旗頭ニ立ツモノナリ」とし、次のように「革命ノ主人」として〈青年〉を指名した。

吾人ハ既ニ我邦知識世界第二ノ革命ヲ来サル可カラサル所以ヲ論シ、而シテ此ノ革命ノ端ヲ啓キ、此ノ革命ノ率先者トナルハ、現時ノ社会ヲ支配スル大人殊ニ其先達タル学者及有志家等ノ責任ナルコトヲ論セリ。然ラハ則チ我カ青年諸君ニ於テハ、此ノ大事業ヲ挙テ之ヲ他人ニ依托シ、徒ラニ袖手傍観スルコトヲ得可キ乎。否々決シテ然ルコトヲ得サル也。(中略) 諸君ニシテ自カラ運動セバ時勢ハ固ヨリ運動ス矣。(中略) 諸君ハ革命ノ主人也。

徳富が〈青年〉に求めたのは、「現時ノ社会ヲ支配スル大人」に代わって新たな知的世界を切りひらく「革命ノ率先者」たることであった。「文明」化に向けての社会改革者としての役割である。

想定されたのは、日本国家を担うエリートとなる階層であったといえる。

さらに蘇峰は「嗟呼我党ノ好青年ヨ、好男児ヨ」と呼びかけ、「青年」を「男子」と言いかえる。

諸君ハ第十九世紀文明ノ世界ニ立ツ、不羈独立ナル青年ナルヲ忘ル可ラズ。(中略)此ノ有
為ノ時代ニ生シ、此ノ有為ノ時代ノ土地ニ産ス、而シテ吾人ハ有為ノ人トナル能ハサルカ、嗚
呼、男子豈ニ空シク死セン哉。

〈青年〉への呼びかけが「男らしさの理想」を喚起したことは明らかである。

さらに、『新日本之青年』発刊から約30年を経た1916(大正5)年、徳富は再び〈青年〉に向け
た本を著わした。『大正の青年と帝国の前途』⁽¹³⁾である。同書は『新日本之青年』を「根本的に改作
したるもの」であったとされるが、改作に至る経緯について徳富は、「明治二十七八年役前後に於て、
予の政治上、社会上に於ける意見は、多大の変化——予の眼中よりすれば進化——を來たし」⁽¹⁴⁾た
ためと述べている。日清戦争を経たことによる彼の変化とは何か。徳富は、自身の思想がここで「内
に平民主義を行ひ、外に帝国主義を行ひ、而して皇室中心主義を以て、両者を一貫、統制する」も
のに変わったと言うが、まさに、国民国家が帝国へと変貌を遂げる段階に対応したものとなったこ
とは明らかである。

〈青年〉への呼びかけも、この目的に沿って変容した。徳富は、「大正の青年」に向けて「何物よ
りも大切なるは、我が日本魂也」と言い、次のように高唱する。「日本帝国の隆替消長は、実に日
本魂の隆替消長也。吾人は大正の青年諸君に向て、先づ第一に卿等の日本魂を涵養せよと云はんと
欲す」。以前の〈青年〉への呼びかけにはなかった「日本魂」が、ここで繰り返し強調されているが、
これは日清・日露戦争で戦勝国となったことで生まれた強国のナショナリズムを表すものといえる。
その「日本魂」に欠かせないのが「尚武的気象」⁽¹⁵⁾であった。「国民が挙げて兵役に就くを、愉快な
る男児の義務とするのみならず、何時たりとも、国家の爲めには戦場に立て、一命を献ぐるの気象也」
と言う。兵役を「愉快なる男児の義務」とし、それを全うすることを説くのである。「尚武的気象」
に由来する国家の姿は、次のように「男児国」と表現される。

国民の兵役に就く熱心の程度は、即ち一国に於ける尚武的気象の試金石とも云ふ得可し。而
して此の標準より観察すれば、現時の日本帝国は、男児国と稱しつつも、聊か男児国の名を辱
しめつつあるものにあらざるなき乎、何となれば我が上流階級の子弟は、動もすれば兵役を回
避するの状あれば也。

「男児国」という言葉には、戦争に勝利し植民地を領有する「一等国」となった帝国の姿が投影さ
れている。雄々しい軍事帝国としての「男児国」の名を辱めるな、というのが彼の「大正の青年」
へのメッセージなのであった。さらなる軍事的帝国化に向けて男性性が発揚され、〈青年〉への呼
びかけが行われたのである。

2 〈田舎青年〉と男性性—山本瀧之介の〈青年〉論

徳富蘇峰が主に国家エリートとなるべき「上流階級」の高学歴男子を対象として想定したのに対して、学歴を持つことができない大多数の男子に向けて〈青年〉への呼びかけをはじめたのは、山本瀧之助である。山本が〈田舎青年〉と名づけたその〈青年〉像は、国家政策と直結した官製青年団の論理となり、日本全国に広がることとなった。以下では、山本の〈田舎青年〉の呼びかけとそこで喚起された男性性について見ていくこととする。

広島県の農村で地元の尋常小学校に教師としてつとめていた山本は、1896（明治29）年に『田舎青年⁽¹⁶⁾』を著し出版したが、同書は大きな評判を呼んだ。山本が同書の執筆に取りかかったきっかけは、やはり日清戦争（1894～95年）であった。山本は、日清戦争時に地元で「少年会」を組織して軍事援護活動をはじめていたが、その経験を経て書かれた『田舎青年』は、ひとにぎりの都会のエリートではない多数の地方〈青年〉が国家に貢献する途を説くものであった。

山本は〈田舎青年〉を「田舎に住める、学校の肩書なく、卒業証書なき青年なり」と学歴を持たない地方の多数の〈青年〉を表す言葉として使い、次のように呼びかける。

抑も青年の青年たる所以のものは心にありて形にあらず、区々たる學術技芸にあらずして、精神氣象に在り、青年の国家に貴重せらるる所以のものは、其有する所の精神氣象、国家の活動進歩に欠くべからざるが故にして、青年の真味青年の真価は一に繋りてここに存するなり。⁽¹⁷⁾

山本が〈青年〉において重視したのは「精神氣象」であるが、それは国家の「進歩」に深くかわり「盛衰興亡」を左右するためであった。「国家の活動進歩」との一体化を何より重視したのである。一方で現実の農村の若者について山本は次のように憤りを表す。

当今田舎青年の大方は先づ第一に国家なる觀念を欠きて、自己の地位職責なるものを弁へず、心に思ふ所のもの総て卑近にして、身に行ふ所のもの概ね浅膚なり。唯小成に安んじて遠大高尚の目的、活発進為の氣象なく、滔々相率いて奢侈柔弱に陥り、放肆怠慢に流れ、容貌の美を衒ふこと一七八の娘の如くなるも、動作の不活発にして煮へ立たざること七十八十の隱居の如く、何事も因循姑息にして眼前の境遇に醉生夢死するは、之を酷言すれば蝸涎の如く、芋虫の如く、陰險狡猾にして一点正大の風なきは猫の如く、狐の如きなり。⁽¹⁸⁾

国家に対する觀念の欠如とともに、「奢侈柔弱」「放肆怠慢」「容貌の美を衒ふ」「動作の不活発」「因循姑息」などの傾向があげつらわれている。〈青年〉たるには、「一七八の娘」や「七十八十の隱居」がもつとされたそれらの性質を排した男性性が不可決なのであった。そして、それらに相対する「質素」「剛健」が男性的素質として推奨されるのである。また、女性嫌悪の激しさは、次の文章からうかがうことができる。

婦女を避けざる可からず。婦女は大なる軟化力にして、青年の身に取りては一種恐るべき魔物なり。されば若し之に触るときは、海鼠の稲藁に溶解するが如く、漸くにして其固有の

硬味を失ふ。然るに世には婦女子と交際を修むる必要を説く輩あり。十歳前後の子供にありては、或は女子と遊ぶものは、平素唯男子のみを友とせるものよりは、礼儀正しく、心親切なるが如きものなきにあらざれども、之を以て彼を推すは、大に愆れるものと云ふべきなり。況んや又婦女は多く劣情を起さしむるの媒介となるものにあるに於ておや。⁽¹⁹⁾

女性は、〈青年〉の「軟化」を促し男性性をそぐ「恐るべき魔物」にほかならなかった。男性性を示す「硬味」は、「礼儀正しさ」や「心親切」といった徳よりも優先されたのである。ここには強いミソジニーが見られるが、彼の奨励する「青年団」とは、女子を排除した男子の結束を核とするホモソーシャルな集団なのであった。

3 帝国化と〈青年〉・男性性——日露戦後の青年団

以上は、日本が国民国家形成から帝国化へと向かう時期に、〈青年〉という呼びかけが男性性を伴ってなされたことを示す顕著な例である。〈青年〉への呼びかけは、近代日本の政治体制が確立する明治20年代に始まったが、日清戦争（1894～95年）期に大きな転回があった。それが、帝国主義を支柱とした近代日本の国民国家の確立と不可分な関係にあることは、明らかである。国家は「男児国」でなければならず、その建設と拡大の担い手としての〈青年〉に求められたのは、徳富が唱える「尚武的気象」、山本の〈田舎青年〉で賞揚された「質実剛健」といった男性性を表す性質であった。いずれも、「因循姑息」な老人への対峙とともに、「軟弱」「奢侈」といった志向やそれらを備えるとみなされた女性を排除する強いミソジニーが特徴的である。これらの性質は、近代日本の「男らしさの理想」を代表するものとなっていったと考えられる。

日露戦争（1904～05年）は、こうした〈青年〉の男性性をさらに喚起し普及させるうえで、日清戦争に続くもう一つの画期となった。当時の中学生向け教育雑誌には、「青年の一大奮進」を求め、「青年諸君はどこどこまでも男らしい男として世に立つ」ことを呼びかけるといった論説が登場した。⁽²⁰⁾ また、注目されるのは、この時期に高まった〈青年〉への呼びかけが、実際にそれに呼応して、自らを〈青年〉と自己規定し、〈青年〉としての使命の自覚に基づいて活動実践をはじめ多くの主体者を生んだことである。地域では青年団結成の動きが広がり、学校でも学生・卒業生による団体が生まれた。筆者が先に分析した事例では、日露戦争開戦時の1904（明治37）年に、埼玉県の川越中学校で学生・卒業生によって自主的に川越中学同志会という同好の団体が結成されている。⁽²¹⁾ 同志会は「人格の修養」とともに「国家社会ノ風紀ヲ改善スル」ことを目的として掲げたが、同会の会誌には「青年諸君に訴える」「青年の元気」といった〈青年〉論があふれていた。そこでの〈青年〉とは、国家的使命を果たすための道徳心を有し、「元気」を特性とするものであったが、同時に「柔順」「文弱」などの性質を持つ者が排斥され、それらに対しては「鉄拳制裁」を辞さないといった形での暴力行使の推奨さえなされた。

先に見た山本の「青年団」構想は、日露戦争後の全国的な地方青年団の叢生に結実したが、1908（明治41）年の『戊申詔書』発布後には地方改良運動下で政策的に推進されることとなった。文部大臣・小松原英太郎は、青年団を「一国道義の中樞也」と位置づけ、次のような期待を示していた。「青年団体といふものが、幸ひに健全で手堅い発達をさへ遂げて参るならば、各地方に其れ其れ制

裁といふものが出来、それが根柢となつて、風紀の革まると共に、茲に道義の根柢が鞏固になるであらう⁽²²⁾。国家的観点から要請される「風紀」改善のために、地方において「制裁」の役割を果たしながら「道義」の基礎を固める者こそが、「青年団」なのであった。さらに、内務・文部両省は1915（大正4）年9月に訓令「青年団体ノ指導発達ニ関スル件」発し、その「健全ナル発達」のための指導を、次のように促した。

（前略）青年団体ハ青年修養ノ機関タリ、青年ヲシテ健全ナル国民、善良ナル公民タルノ素質ヲ得シムルニ在リ、随テ団体員ヲシテ忠孝ノ本義ヲ体シ品性ノ向上ヲ図リ体力ヲ増進シ實際生活ニ適切ナル知能ヲ研キ、剛健勤勉克ク国家ノ進運ヲ扶持スルノ精神ト素質トヲ養成セシムルハ、刻下最モ緊切ノ事ニ属ス。⁽²³⁾

「青年団体」を「修養ノ機関」と位置付けるとともに、養成されるべき模範〈青年〉の性質が「剛健勤勉克ク国家ノ進運ヲ扶持スルノ精神ト素質」と表現されている。これは男性性を備える〈田舎青年〉像と合致する。

4 1920年代における〈青年〉と男性性の変容

日清・日露戦争を契機とする帝国化へ向けての意識喚起に大きな役割を果たした〈青年〉の男性性は、その後の歴史過程ではどのような経緯をたどったのか。以下では、1920年代を中心にその見通しを述べておきたい。

まず、〈田舎青年〉を体現した「青年団」は、国家政策の後押しを受けて大規模な組織的拡大をみることとなった。文部・内務省は、第一次世界大戦終結を見据えた1918（大正7）年5月に訓令「青年団体ノ健全発達ニ資スベキ要項」を発したが、そこでは「国家活力ノ源泉タル青年ノ努力」への強い期待が示されている。また、1925（同14）年には全国各地の青年団の連合体として大日本連合青年団が結成された。ただし、1920年代においては、強いミソジニーとホモソーシャルな集団性を特徴としていたそれまでとは異なる変化が生まれたことにも注意する必要がある。男子のみの青年団に対して女子を対象とする処女会が奨励され、さらに1926（大正15）年には女子青年団を奨励する内務・文部両省による訓令が出されたのである。第一次世界大戦を機とする欧米での女性参政権付与などの動きを背景に、女子の「国民」への包摂が進められたことの表れといえる。青年団と女子青年団はあくまでも別組織で、後者には「婦徳」養成が掲げられるなど目的は大きく異なっていたが、この動きが相並ぶ青年団の男性性にも影響を及ぼしたことは推測できよう。単なる女性排除から、役割を異にする男女という対を前提とする発想への変化であり、近代家族形成を前提とする男性性といえよう。内務官僚・田子一民は「良夫良父主義」を提唱している⁽²⁴⁾。

一方、1905年の日露戦争後から第一次世界大戦を経た1920年代にかけての時期は、従来は「大正デモクラシー」期と呼ばれてきたが、近年では男性史の観点から都市民衆騒擾における暴力行使の問題に焦点化して読み替える藤野裕子の研究が出されている⁽²⁵⁾。藤野が注目するのは、社会的疎外感や劣等感、承認願望に裏付けられた男性労働者たちの「男らしさ」の希求であるが、あわせて政治社会に進出する〈青年〉にも目を向ける必要があると考える。「デモクラシイ」の機運とともに

叫ばれる「大正維新」の担い手は、まさに〈青年〉であった。「閥族打破」を唱える運動をリードしたのは「青年党」であり、それに呼応する形で各地で「元老」排撃に立ちあがった青年党類似団体は、実際に地方における旧来の名望家秩序を改編させていくこととなった⁽²⁶⁾。その際に発揚されたのが、「固陋」を退け新時代を切り拓く〈青年〉の男性性であったといえよう。

一方、1920年代には、国家の基盤としての農村を下支えする道義性をもった〈田舎青年〉とは異なるタイプの〈青年〉と男性性がメディアに登場する。現状打破や大胆な改革を担う男性性を備える〈農村青年〉である⁽²⁷⁾。1920年代には、急激な都市化の反面で進行する農村の経済的な困窮が深刻な社会問題とされたが、困窮する農村の改革の担い手として名指されたのが〈農村青年〉たちであった。1923（大正12）年の『改造』誌で「農村青年に与ふ」という特集が組まれるなど⁽²⁸⁾、〈農村青年〉という呼びかけは、繁栄する都市と対照的に疲弊する農村の救済者への期待として現われ、実際の農村ではそれに呼応する動きも起こされた。それは、行政主導による既存の青年団の「自主化」、農民組合の青年部、産業組合の青年聯盟（産青聯）の結成といった動きとなった。いずれも現状に対する強い改革志向が特徴的であるが、その原動力になったのは、改革者としての〈青年〉という自己認識と男性性であったといえよう。

一方、こうした政治社会への主体的なかかわりを促す〈青年〉の男性性とは異なるタイプもこの時期に表出した。その代表といえるのが、1920年代末から30年代初めにかけての都市空間のモダニズムを背景とするモダン・ボーイである。モダン・ボーイを特徴づけるものは、消費・享楽指向、勤労の忌避、女性—モダン・ガール—との交遊、ジャズやダンス、アメリカナイズされたお洒落なファッションなどであった。それらの性質は、まさに〈田舎青年〉が旨としていた「質素剛健」とは明確な対照をなすものである。モダン・ボーイを論じる多くの論者はそうした指向や行動をやり玉にあげたが、その際、必ずつきまとったのは、「男らしさ」に欠ける者という見方であった。しかし、こうした従来の〈青年〉像から大きく逸脱したモダン・ボーイは、1930年代には、「日本男児」言説の台頭のなかで排斥の対象とされていく。

その後の戦時体制下における〈青年〉と男性性については、あらためて検証しなければならないが、ここでは、そのための上記のような1920年代にみられた男性性の変容が転回を遂げる契機として、1932（同7）年の「爆弾（肉弾）三勇士」の登場を指摘するにとどめておきたい⁽²⁹⁾。1931（昭和6）年の満州事変は「15年戦争」の開始を告げたが、「爆弾三勇士」は、翌32年の上海事変の際の3人の兵士の行動を称えて命名された呼称である。敵陣に爆弾を抱えて突撃し、窮地に追い込まれていた日本軍の攻撃の突破口をひらき戦況を好転させたというその語りは、雑誌・新聞といったマス・メディアや映画、歌などの大衆文化を通して広がり一大ブームを起こすとともに、学校教育の場でも修身の題材として取り上げられていく。「爆弾三勇士」は、日本軍の戦況をひらくために自己犠牲を厭わない勇敢な若い兵士として語られ、主人公である三人の兵士は、エリート軍人ではない一等兵であるという点で〈田舎青年〉の性質を持ちながら、「尚武的気象」をそなえ、国家的使命に忠実である「日本男児」として表象された。都会的で華やかなモダン・ボーイへの憧憬が広がっていた1930年代初めという時期に、この「日本男児」表象が、まさにそのアンチとして「男らしさの理想」を提供したことは確かであろう。

II 戦後国民国家再興をめぐる〈青年〉と男性性

1945（昭和20）年8月の大日本帝国の敗戦は、それまでの国家的価値の転回をもたらすこととなる。国家的価値の浸透や戦意高揚を下支えしていた〈青年〉と男性性は帝国崩壊後にどのように変容したのか、また〈青年〉と男性性は、戦後国民国家再興に際してどのように発揚されたのか。ここでは、そうした問題を、帝国崩壊後から戦後日本が国民国家再興を果たす1950年代にかけての時期を中心に考えていきたい。

1 敗戦直後の国家再編期における〈青年〉と男性性

太平洋戦争末期には徴兵が進むなかで、修養の機関とされた地域青年団は本来の役割を果たすことができなくなっていた。その時期の青年団の活動について、北河賢三は興味深い指摘を行っている。戦争末期の長野県下伊那村の青年団では、出征兵士の家族慰安のための演芸会を男女青年団主催で行っており、ここでは「やくざ物」の演目が歓迎され、「女子の男装」「男子の女装」も認められていたというのである。「やくざ物」の内容は明らかではないが、「やくざ」が、〈田舎青年〉に求められた「質実剛健」「勤勉」といった性質とは正反対の男性性を体現していたことは確かであろう。そこには、ジェンダーの越境性もみられた。15年戦争初期に称揚された「日本男児」とこのように戦争末期に人気を集める「やくざ」の男性性との関係や、その広がりについては、別途考察をしなければならないが、模範〈青年〉養成を目的としたはずの青年団の実態が戦争末期に大きく変わっていたという事例は注目される。

敗戦後、復員者を迎えることとなった青年団の活動は、再び活性化することとなった。敗戦後の青年団の新たな活動には、町内会の改革や隠退蔵物資の摘発や不正配給の監視、食糧増産運動、引揚者への援護活動などがあった。一方、戦時下にはじまった青年団主催の体育会や素人演芸会は、敗戦直後の地域の人びとへの娯楽の提供に大きな役割を果たしたが、全国各地で大流行した演芸会で人気を集めたのは、やはり「やくざ芝居」や「やくざ踊り」だったといわれる。

このような敗戦後の地域青年団のあり様に対して、国家的に統一した基準や方向性を与える動きは1945（昭和20）年9月の文部省による「青少年団体設置要領」に始まり、明確な指導はGHQ民間情報教育局青年部の関与の下で進められることとなった。国家建設の一翼を担う模範的〈青年〉養成という青年団の目的が、敗戦後も再び掲げられたといえる。ただし、そこで目指された模範〈青年〉像は、「民主主義」の担い手として変えられた。1949（昭和24）年に刊行された『青年団ハンドブック』は、青年団の目的を「新憲法の精神にそのような民主的な日本をつくりあげること」とし、「民主主義の遵奉者としての人格の向上につとめ社会的教養を身につける」ことを第一に掲げていた。

当時結成された地域青年団の例を見てみよう。1946（昭和21）年5月に東京府南多摩郡多摩村で結成された青年団を見ると、「新日本建設」が強く意識されながら、事業としては「国体護持ノ精神昂揚ヲ図リ日本民主主義ノ徹底ニ依ル团员ノ智徳涵養体位向上実務上ノ智識技能ヲ修得セシムルコト」とあり、「日本民主主義」が「国体護持」とともに並んでいた。同青年団の機関誌『新生タマセイネン』の巻頭には以下のような宣言が掲載されているが、それはまさに未来の「民主主義

日本建設」に向けての〈青年〉への呼びかけとなっている。

今や昭和維新である。此の時にあたり、吾等青年は一致団結、がつちり肩を組み、足並揃えて発足しなければならぬ。(中略) やがて遠くに見える烽火の様な希望の民主主義日本建設が出来たならば、吾等は声高々に萬歳をさけぼうぞ。⁽³³⁾

また、山形県青年団は、『青年今ぞ起つ』と題した青年団員の弁論集を1946年に発刊している。⁽³⁴⁾ 各弁論のタイトルを見ると「青年日本の黎明」、「いざ振はむ建設の鍬を」、「現下青年の叫び」といった勇ましいものが目立ち、「新日本建設」に向けて「青年の責任」を自覚し、「虚脱」から脱して再起することを促す内容が多い。だが、なかには〈青年〉への呼びかけに困惑を示すものもあった。巻頭の田村五郎の論は題名こそ「文化日本建設は我等の力」と力強いが、次のように書く。

世間の凡ゆる人が、「今こそ青年が崛起しなければ駄目だ。老人では間に合わぬ。勤労青年及び若き学徒の烈烈たる情熱と意気とを以て、此の難局を突破し、新しい日本を建設しなければならぬ」と言ってくれるのであります。然し乍ら、吾々青年は一体どうして立ち上げればよいのか。新しい日本を建設するには、先づ第一に吾々は何を為すべきか、その具体的方法をはつきり指し示してくれる人はいないのであります。⁽³⁵⁾

この筆者・田村は結論では、「青年諸君よ。吾々は先づ第一に自我に目覚めよう。自己の権威に目覚めよう。特に女性諸君よ。諸君は男性の玩弄物ぢやないんだ。男性の『おもちゃ』ぢやないんだ」と呼びかけている。⁽³⁶⁾ 「虚脱」状態と混迷の中で、「新日本の建設」に立ちあがる「男らしさ」よりも、「自我」「自己の権威」への「目覚め」を重視するのである。また、女性に対して同じ権利を持った人として呼びかける姿勢は、従来の青年団には見られなかったもので、この時期に特徴的といえるだろう。

ここで確認しておきたいのは、「新日本建設」に向けての〈青年〉の自覚には、男性性を喚起するものがほとんど見られないとともに、それを語る事が男子の特権ではなくなったという点である。弁論集の書き手には女子も入っており、そこに共通するのは、参政権獲得をふまえ、「民主国家建設」に向けて「我々女性の使命の重大さ」の自覚が述べられたことである。「女とて決してやれぬではありません。父を兄を戦場に送り、かよわきこの手で十分に留守宅を守つたではないか。ただ勝つために真剣でした。必死でした。あの意気をふるひ起し、祖国再建の土台となる心算で頑張りませう」と、銃後の戦争体験を起動力とする論もある。⁽³⁷⁾

組織のうえでも、新生青年団は、男子と女子とで組織や目的を異にしていたものからひとつの青年団となり、役員も男女それぞれ同数選出されることとなった。⁽³⁸⁾ 従来のホモソーシャルな〈青年〉集団はもはや成り立たず、ミソジニーを強く孕んでいた〈青年〉の男性性は他者である女性の参入を受けて変更を迫られることとなる。ではその後、〈青年〉と男性性はどのような経緯をたどるのか、次章では1950年代を中心に考察していく。

2 サークル運動の時代と男性性

1) 新たな主体形成としてのサークル運動

1950年代は、1952（昭和27）年4月の講和条約発効と日米安全保障条約の締結に示されるような、冷戦体制の下で日本の独立国家としての再建が果される時代である。一方、人びとの個や共同性のあり方に視座をおく近年の社会史的研究の視点から見ると、1950年代前半は「サークルの時代」としてとらえられる⁽³⁹⁾。女性史研究者の西川祐子は、「サークル運動再考」のタイトルの論考で、「(1950年代は)戦時下および戦時下の生活からようやく解放されようとする個人々が、他者との新たなつながりを模索して自発的に形成した小集団が無数にうまれた時代であった」と位置づけている⁽⁴⁰⁾。サークル運動は、1950年代前半の日本共産党の大衆運動方針との関係抜きには捉えられないが、実際のサークルの広がりはその範囲を超えたものとなり、そこにはサークルに向かった個人々の自発性・主体性がかかわっている。ここでは、「サークルの時代」としての1950年代前半期を対象に、そこで男性性について見ていきたい。最初に指摘しておきたいのは、サークル運動においては、〈青年〉という呼びかけがほとんど見られないということである。サークル運動に参加した年齢層は青年団と重なっているが、青年団にあった国家建設の模範的担い手や社会改革者を示す集合名詞としての〈青年〉が欠けていた。女性たちを主とした生活記録運動もサークル運動の代表例であるが、そこで多用されていたのは書き手である「私」という一人称、「ひとりひとり」という言葉であった。こうした点こそが、サークル運動の特徴といえる。

まず、サークル運動が最高潮にあった1955（昭和30）年に、雑誌『知性』（河出書房）で組まれた「新しい日本をつくるサークル運動」という特集から見ていきたい⁽⁴²⁾。特集の冒頭で清水幾太郎は、「日本の人間そのものにとって決定的な意味を持っている」とサークル運動の画期性を指摘する。清水は、サークルという小集団を「ひとりびとりの個人の直ぐ近くの、個人の姿がまだ消えぬ、そういう集団」と表現し、「サークルは、不完全ながら、現代社会のうちで人間の全体性の回復を可能にしながら、新しい社会におけるその究極的な回復を用意するもの」と述べている⁽⁴³⁾。「新しい社会」を意識しながら社会建設自体を目的とするこれまでの運動論とは異なり、主眼が置かれたのは個人ひとりひとりの「人間の全体性の回復」であった。

サークル運動は、〈青年〉の修養や国家的使命の遂行を目的とする青年団と性格が違ふことは明らかであるが、『知性』の特集には、長野県軽井沢町の借宿青年団員と早稲田大学劇団自由舞台とのサークル活動の交流の記事がある。その中で青年団副団長は、自分たちが青年団の中にサークルを作った経緯を次のように語っている。以前あったのは「演芸会青年団」のようなものだったが、「演習地の問題」が起きたときに東京から来た大学生の劇を見たことがきっかけで「おれたちにもできる」「ああいうものをみんなでやろう」ということになりサークルが生まれた、というのである。「内部にもっている自分でもわからないものを、学生の人に具体的に示されてはじめて、自分の要求に気づきサークルもできた」と語っている⁽⁴⁴⁾。外からの要請ではなく、個人の内面の「興味」「要求」から生まれた活動集団をサークルと呼んでいるのである。

では、サークルは、ジェンダー特に男性性の視点からはどのようにとらえられるだろう。特集に掲載されている座談会を見てみよう。座談会は、ある銀行の職場サークルのメンバーが鶴見和子と日高六郎を聞き手として語ったもので、人形劇・コーラス・経済研究会などのサークルメンバー5

名のうち男性は1名であった。まずメンバーからサークルに参加した感想として、「ものがいえるようになった」、「ざっくばらんに話せるひとがふえた」、「本当に人間と人間とがふれあう感じにすごく感激して、抜けられなくなった」という言葉が出されている。「私たちは自分自身を変革する」が座談会の見出しとなっていたように、他者とのつながりの中での自分の成長が中心に語られていた。一方、サークルに参加するのは女性が多いという指摘もあり、それについて「銀行の男の人は転職もはげしいのですが、大体はいつてくる人に学校を一番の成績ででたとかいう天狗連が多い。それでサークル運動などやっているより学問的勉強をするのだと構えているのです」という男性からの発言がある。この職場サークルの例でみるならば、サークルは、会社に献身し昇進をめざすような男性性とは無縁であったといえよう。

このようにサークルとは、メンバーは青年団とほぼ重なりながらも、〈青年〉との名乗りや呼びかけはなく、あくまでも個人の成長や個々のつながりを基盤としたものであった。その点で、「新日本」の建設を謳う〈青年〉への呼びかけに困惑する若者や女性を引き付けながら、この時期に広がっていったと考えられる。

2) 「工作者」の論理と男性性

あくまでも個々人の「人間の全体性の回復」をめざすサークルが、集団としての一体性を重視する会社や政党、組合といった組織と異質であることは確かである。しかしながら、サークル運動の展開の中では、サークルの組織化やその方向づけを行う者の存在が欠かせず、多くのサークルが、当時の日本共産党の指導下にあったことは無視できない。共産党に籍を置きながら九州の炭鉱地帯でサークル運動を進めていた詩人の谷川雁は、自らその役割を担う者として「工作者」を名乗った。ここでは、工作者・谷川雁に注目してそのジェンダー観や男性性について見ていきたい。

谷川が活動の場とした九州では1950年代に多くのサークルが生まれたが、谷川は、九州各地に分散孤立していたサークル活動家を結集した新しい集団—「一つの村」をつくること意図し、1958(昭和33)年に福岡県中間市を拠点に、機関誌『サークル村』を創刊した。全国的に50年代前半に高揚していたサークルは50年代半ばを過ぎるころから退潮に向ったとされるが、その状況を転回させるという意図もあった。『サークル村』編集を谷川とともに担ったのは森崎和江や上野英信らであったが、ここでは、谷川がとりわけインパクトを受けたのが、炭鉱の坑内労働に従事した女性たちの聞き書きを行っていた詩人の森崎であったことに注目したい。

1955(昭和30)年に谷川は、森崎との出会いについて書いた「森崎和江への手紙」を発表している。そこには、「若くもない老いてもいない男女の会話、既婚の男女の内的な友情を表す語法……これはわが国語のまだ達成していない領域ではありますまいか」という、男女の対話の成立を危ぶむ言葉とともに、次のように、森崎という「女」の言葉を、「男」である谷川が理解しようと努める姿と理解した内容が書かれている。

口惜しそうに、噛みしめるように「男のかた！ そして女も！」やつと私は理解しました。貴女が恐ろしく抽象的な言葉で攻めたてていられるのが性愛の原理ではなく、さらに広い異性間の交通、生命の存在様式たる性の形而上学であることを。男性にとっては性といえば性愛にすぎない。だが女性にあつては性は母として妻として生活の全一的支配者、いわば暴虐な権力

者であることを貴女は訴えておられた。⁽⁴⁶⁾

さらに谷川は、新聞への女性の投書を取り上げ、「そこで描かれている主題は一性と民主主義が直結する可能性を探りあてること、性の中立化を拒むこと—であります。私はこのことに注目しないわけにはゆきません」と言う。谷川が注目した女性の投書は、生活綴り方の語りと重なるものであった。谷川は、そうした森崎や投書の女性の言葉に、男性にはない「性と民主主義が直結する可能性」を見ていたのである。だが、同時にその言葉を「我々男性にとって或る種の神秘的雰囲気（ある）が漂って（いる）」とも表現し、女性性の可能性を「神秘」性とともにとらえていた。最後には「私自身が倒錯と中立化に陥らないよう、首尾よく翼を生やしますか。とにもかくにも男と女のつながり、結び目を強くしないことには……」と書いているが、ここからは、谷川が男性性の自覚に立ちながら、女性を自らとは異質な存在ととらえて結びつきを求めていることがわかる。

『サークル村』に谷川の「女たちの新しい夜」という文章がある。⁽⁴⁷⁾彼は率直に、「炭鉱の主婦たちがひとしきり塩から声でわめいたのち、ぽつりと滴らせるつぶやき」に接したときの「おどろき」を書いている。「彼女たちに一種の反道徳的姿勢でしか切りひらけない荒野がある」とし、谷川はそこに、「政治は政治、愛は愛」という二分法でない「愛と革命を同義語」ととらえる言葉を見いだすなかで、「男」を再考しようとする。

男にとってみれば、事態はこうなのだ。すべての言葉、すべての形式が自分自身の性をもとにしてできているので、それから脱出しようとしても次の部屋、次の着物が待ち受けている次第で、解放された場所や裸体がどこにあるのか分からなくなってくる。女と同じように、運動のなかに性を発見できない。（中略）労働と創造と愛の次元が結びつく場というものを実感的に空想することもむつかしくなっている。⁽⁴⁸⁾

谷川は、現実の男性中心で成り立つ社会の問題を認識しながら、女性性による「革命」に期待を寄せ、「一步進むためには男と女の集団的な結合が必然の愛で裏うちされていなければならない」とする。だが、最終的には、「いまの私は、阿保のようにそれに向って聞耳を立てているよりほかはない」とその不可能性を表明する。現実の社会を構成している男性性の問題を、理想化・神秘化される女性性との対比で認識した谷川であったが、自らの男性性を問うことは難しかったといえよう。⁽⁴⁹⁾

3 「戦後体制」の始まりと〈青年〉の再定義

1950年代は、日本が講和独立により国民国家再興を果し、戦後国民国家体制を確立していく時期であるが、その半ばに大きな転機がある。1955（昭和30）年は、戦後政治の枠組みとなる「55年体制」が成立するとともに、日本共産党が「六全協」でそれまでの路線を「極左軍事冒険主義」と自己批判し「平和革命路線」に転換した年である。1956（同31）年の『経済白書』に書かれた「もはや戦後ではない」という言葉は、戦後復興段階の終わりを告げるものだった。その後長く続くこととなる「戦後体制」の起点はこの時期にあったといえる。

ちょうどその「戦後体制」の起点としての1950年代半ばの時期に、〈青年〉が再び名乗りを挙げ、社会的なブームを巻き起こすこととなった。ここではその代表として、この時期に芥川賞を受賞し脚光を浴びた二人の〈青年〉作家—石原慎太郎と大江健三郎、そして彼らをつなぐ結節点となった江藤淳や「若い日本の会」を取り上げたい。石原・大江という二人の作家の作風は大きく異なるが、この時期に共に主題として描いたのが、同時代の〈青年〉像であったことは共通している。その作品のテーマや内容は激しい議論を呼びながら、彼らは、社会的常識や道徳に反旗を翻す「新しい世代」「戦後世代」としてマス・コミで大々的に取り上げられ、自らも〈青年〉性を強く意識した作品を発表するとともに、社会的な発言を行っていた。本稿では彼らの文学的な位置づけや評価に立ち入ることはできないが、「55年体制」を起点とする「戦後体制」の始まりといえる時期に、彼らの描く〈青年〉が社会的な反響を引き起こしたことに注目し、二人が描く〈青年〉像に焦点をあてながら、そこで喚起される男性性の問題を考えたい。

1) 石原慎太郎の描く〈青年〉と男性性

石原慎太郎は、1956(昭和31)年に『太陽の季節』で芥川賞をこれまでの最年少の24歳で受賞し、続けて『狂った果実』(1956)、『処刑の部屋』(1956)、『若い獣』(1957)、『青年の樹』(1959)など、若い男たちを主人公とする小説を次々と発表していた。『太陽の季節』はすぐに映画化もされ大ヒットを博し、既存の道徳に背を向け無軌道な行動をする若者たちを指して呼ぶ「太陽族」という流行語も生まれた。

これらの小説に込めた当時の石原の意図は何だったのか。石原は、1957(昭和32)年の『婦人公論』に「現代青年のエネルギー」という論考を発表しているが、その冒頭で、「私は青年について語らねばならぬ」と自らの小説執筆のモチベーションについて語っている。さらに、それに続けて石原は次のように言う。

今日の青年にとって、「戦後」は「戦争」に比べてより大きく残酷な意味を持った。青年に与えられたものは、戦争が与えたあの暗黒の不安に比べて、きらきらと明るく、目くるめいた、いわば白昼の不安に他ならない。

既成の人間観、人生観、或いは何らかの理念、いやすべての観念を形成した時代は、今やとうに過去のものでしかない。青年の前にはさらに多次元な、資質も単位もすべて異なった「現代」がある。そしてわれわれは、この現代に生きなくてはならぬ⁽⁵⁰⁾。

石原は「現代」を、かつての「戦争」の時代には確かに存在した価値観や理念を喪失した時代ととらえ、「明るく、目くるめいた」「白昼の不安」と表現する。彼が小説を通じて提示しようとしたのは、「この現代に生きなくてはならぬ」〈青年〉の姿であったといえる。

では、石原の描いた〈青年〉の姿とはどのようなものか。石原は、「青年らしさとは、そもそもなんであるのか」と問いかけ、「青年はいかなる場合にあってても行為者にほかならぬ」と答えを出す。ここで彼の言う「青年に似つかわしい行為」とは、「酒を飲むこと、女をひっかけること、心中すること、赤旗を振ること、喧嘩、スポーツ、その他無数」であった。それらの「行為」の基にあるのは男性身体にほかならない。石原は、「現実」との遭遇の中で「青年の行為はすべて、彼ら

の理性のゆえに挫折し、不純化され、その主権を喪失せざるを得ない」としながら、〈青年〉とは、そこでなお「肉体的若さ」のゆえに「行為への渴仰」を絶つことのない者たちである、と定義し、〈青年〉への共感を顕わにするのである。「己れに誠実であろうとするがゆえに呻吟し、絶望しながら生きている青年すべてに、私は激しい共感を覚えてならない」と。彼が言う〈青年〉とは、次のような者たちであった。「自殺狂の青年。憑かれたように自殺に等しい登山を繰り返す登山家。潔癖に、絶望の絶対を信じ、それゆえに人間の内なる非理性を信じ、自らテロリストを願う右翼青年。同じように心靈学に打ち込む男。大学を卒業し、仕事を持ってからも一週六日をただ日曜一日のフットボールの興奮のために暮している選手。……青年社長。……悲願の女千人斬りを嘯く元神学生等々」。

ここで提示される〈青年〉は、既成の人間観や理念がすでに過去のものとしてとらえられるようになった「戦後」という時代を切り拓くという意味で、新しい〈青年〉神話の誕生を示すものであったと言えよう。旧青年団でモデルとされた「質実剛健」を特性とし「新国家社会の建設」を担う模範的タイプの〈青年〉とはまったく異なり、相反しているように見える。「肉体的若さ」を原動力とし、自己の欲望にしたがう「行為」をためらわない者としての〈青年〉、そこには男性性の強い顕示がある。石原が「共感」する〈青年〉の特徴が、いずれも強い男性性—マチズモに根ざしていることは明らかである。そこで女性は、〈青年〉になる資格を持たない。石原の代表作とされる『太陽の季節』『処刑の部屋』で女性は、自我をもつ存在ではなく、男性性の賛美者あるいは男性の性的欲望や暴力行為の対象としてのみ描かれ、あまつさえ小説の最後では命が抹消される。そこにはミソジニーがつきまとっている。

2) 大江健三郎の描く〈青年〉と男性性

大江健三郎は、1958（同33）年に『飼育』で芥川賞を石原よりもさらに若い23歳で受賞し、50年代末から60年代にかけて、『われらの時代』（1959）、『孤独な青年の休暇』（1960）、『青年の汚名』（1960）、『遅れてきた青年』（1960～62連載）などの〈青年〉を冠した小説を次々と発表した。大江の描いた〈青年〉について、『われらの時代』⁽⁵¹⁾（1959）を取り上げて見ていきたい。

『われらの時代』の冒頭で描かれるのは、主人公の大学生・南靖男が女性と性行為を行いながら「孤独な思考に頭をゆだね（る）」様子である。靖男は「若わかしい筋肉となめらかな皮膚」をもつものとして、一方の女性は、ここでは名前も出されず「脂肪にみたされた汗まみれの中年の女の体」とミソジニーを孕む男性性との対比で表現されている。靖男の「孤独な思考」—「自己嫌悪と絶望感にみちた堂どうめぐりの考え」とは、次のような「時代」についての思考である。

日本の若い青年にとって、積極的に希望とよぶべきものはありえない。……おれがほんの子供だったころ、戦争がおこなわれていた。あの英雄的な戦いの時代に、若者は希望をもち、希望を眼や唇にみなぎらせていた。それは確かなことだ。……今やおれたちのまわりには不信と疑惑、傲慢と侮蔑しかない。平和な時代、それは不信の時代、孤独な人間がたがいに侮蔑しあう時代だ。

（中略）おれは遅れて生れてきた、そして次の友情の時代、希望の時代のためには、あまりにも早く生れすぎたのだ。⁽⁵²⁾

ここで提示される同時代についての感覚とその時代に生きざるをえない〈青年〉というフレームは、石原とも共通している。「戦争がおこなわれていた」「英雄的な戦いの時代」は「希望」に満ちており、それが終わった「戦後」という現在は、「平和な時代」であるが「不信の時代」「孤独な人間が侮蔑しあう時代」と対比されている。その「希望とよぶべきもの」のない時代に生きるしかない者こそが、〈青年〉なのであった。

小説では、主人公・靖男の「希望」の可能性が、国費奨学生としてのフランス留学とアルジェリア独立運動との「連帯」に見いだされようとする。その一方、靖男の「情人」である頼子—アメリカ人を愛人に持つ「中年の女」—の妊娠は、「希望」どころか靖男の未来の可能性を閉ざすものでしかない。フランス文学の論文コンクールで一席になり留学の門戸が開かれた時、またアルジェリア民族戦線のアラブ人の男性と出会った時の様子は、次のように描かれる。「靖男が脱出するのは他ならない薔薇いろのぐにゃぐにゃした女陰的世界からであり、西欧は硬くひきしまつてさすがしく、一人の東洋人の到来を待っているだろう！」、「靖男の眼は、女陰的な世界とは全く無縁の、すばらしく徹底して男性的な人間が男らしい、じつに男らしい方法で自己を誇示するのを見たのである。アラブ人だ。……脱出、男らしい脱出、それを行わなければならない！」⁽⁵³⁾。頼子に象徴される「女陰的な世界」が、占領後もアメリカに依存する現実の日本の表象であることは間違いない。小説からは日本人〈青年〉の男性性の獲得というテーマが読みとれるが、〈青年〉を「男らしい脱出」へと誘うものは、西欧の知的世界や第三世界の民族独立運動であった。だが、主人公がそれらをいずれも達成できないままに終わっている。

石原が描く社会的関係を度外視して自らの男性的身体の欲望のおもむくまま突き進む「行為者」に対して、大江の主人公は現実の社会的関係の中で彷徨いながら女性性からの脱出と「男らしさ」の実現を果たそうとする。国家・社会の求める役割を果たす一人前の「男」になるという「希望」を見いだすことができない「時代」の中で「主体化」に向けてもがく〈青年〉の姿が、当時の日本という国家の姿を想起させる形で投影され表わされていた。その表象にミソジニーが深く刻印されたという点では、石原との共通性がある。

3) 「若い日本の会」と安保闘争後

石原慎太郎と大江健三郎という今日では政治的に対極とみられている二人は、同世代の評論家・江藤淳の呼びかけに応じて、1958（昭和33）年11月に発足した「若い日本の会」に参加している。この会は、岸内閣が議会上程した警察官職務執行法改正法（警職法）案に反対する声明を発表した。そこには山川方夫、谷川俊太郎、浅利慶太、武満徹、羽仁進、吉田直哉という新進気鋭の作家や詩人、演出家などの文化人たちも名を連ねていた。また、1960（同35）年6月の安保批准に向けての岸内閣の強行採決に際して、「民主主義よ、よみがえれ」をスローガンにアピールを行った。中心となった江藤淳は、その意図を次のように語っている。「われわれ戦後の民主主義教育を受けた世代は、安保それ自体については意見が一致しなくとも、五月十九日夜の国会の事態を無視できない。しかし、われわれは組織を持っていない。この会は、その声なき民の声をアピールさせるためのものだ」⁽⁵⁵⁾。「われわれ戦後の民主主義教育を受けた世代」と表現されているが、ここからは、保守／革新という政治的立場を超えた〈青年〉の主体表明をみることができる。会主催のシンポジウムを取材した記事の見出しには、「前世代との断絶を確認する」とある。会に結集したメンバーた

ちの共通点は、「戦後」という時代に自己の主体形成を模索する〈青年〉性にあったといえよう。「戦後」という時代への「絶望」を語っていた二人の〈青年〉作家が、このような形で現実の政治問題に関わるようになったことは注目される⁽⁵⁶⁾。

安保闘争は1960年6月30日をもって終息し、「若い日本の会」も解散に至った。だが、その後の60年代に、石原・大江という二人の〈青年〉作家たちが、それぞれの方法で「日本」という「国」を「日本人」として背負う意識を強めるようになっていくことに注意を向けおきたい。60年夏に中国訪問から帰国した大江は、安保闘争での敗北を見据えたうえで、「日本がアメリカの支配下において、日本を動かすものが日本人の意志でないという事実」をにらみながら、「日本の青年」が「根深い絶望と政治的無関心」を抜け出し「国について情熱を回復する」ことを求めた。「日本人青年にとって、最も重要なことは、日本人の政治がすべて日本人の手によっておこなわれる状態をつくりだしたい、ということである」と彼は希望を語る⁽⁵⁷⁾。

石原は、1968（昭和43）年の参議院議員選挙に自民党から立候補し、全国区で多数の票を獲得しトップ当選を果たした。その時の彼の掲げたスローガンは、「青年の国をつくろう」であった。「国家は、歴史は、青年の参加なくしては決して新しい頁を開きはしない」と石原は訴えていた⁽⁵⁸⁾。〈青年〉としての主体形成を目指した二人が、政治的立場やその方向性は異なりながらも、「日本」の国家再興を強く唱えるようになっていたことが見て取れよう。

その後、彼らに代表されるような「戦後」世代の〈青年〉たちは、「戦後体制」の一翼を担うことになっていく。彼ら〈青年〉が表明するようになった「日本」意識とミソジニーを伴う男性性の論理が、その後の戦後史においてどのように発揮され変容していくのか、この問題については、戦後史再考の問題として今後あらためて考えていきたい。

おわりに

本稿では、国民国家の建設が課題とされた時代に、〈青年〉とそれに付随する男性性とその推進力となったことを論じてきた。近代日本の「男らしさの理想」を体現する〈青年〉は、まさに国民国家建設という課題を主体的に担う道義的存在として構築された。〈青年〉は、「日本」の未来を背負う者として位置づけられながら、男性性を紐帯としたホモソーシャルな集団形成がなされたが、それは同時に、男性性を損なうものとして女性性をとらえ排除する志向をもち、老人や女性などを他者化するものとなった。

近代西欧モデルの新しい国家建設を担う〈青年〉への呼びかけは、明治20年代に始まるが、〈青年〉の社会的な氾濫は、日清・日露戦争という侵略的な対外戦争とともに国威発揚がなされ、戦争の勝利によって「一等国」意識が高まるなかで起こった。日清戦後に日本各地のエリートになれない多数の若者男子に向けて書かれた山本龍之介の『田舎青年』は、帝国日本の基盤となる地方における〈青年〉の自覚と行動を促すものであったが、それは国家政策のもとでの青年団の組織化という形で進められることとなった。〈青年〉にふさわしい男性性を示す性質は「剛健」「尚武」「勤勉」にあるとされ、一方でその対極にある「軟弱」や「奢侈」は、女性性と結びつけられながら排撃の対象とされ、女性を排除したホモソーシャル的なつながりが重視された。このような〈青年〉像は、近代日本において模範的男性性を表す一つの柱となったといえる。

〈青年〉には、「新しい時代を切り拓く者」すなわち社会改革者という意味がある。それは明治期の徳富蘇峰の〈青年〉論にもみられたが、大正期にはそうした改革者としての〈青年〉像は〈青年〉運動という形で発揮されることとなった。「閥族打破」を掲げる「青年党」の運動や、1920年代の農村の窮乏を打破するための〈農村青年〉運動がそれである。一方、1920年代には、それまでの国家的な道義性や改革者としての〈青年〉モデルとは対極的な若い男性表象も見られた。〈青年〉の特質とされた「質素」「剛健」「尚武」といった性質を欠き、アメリカナイズされた娯楽・消費文化を謳歌し、女性との交際や恋愛にふける都会の「モダン・ボーイ」である。だがそれは、15年戦争開始まもなく登場した「爆弾三勇士」ブームを転機として、命を惜しまず戦に臨む「日本男児」賛美の風潮に代わられることとなる。

日本敗戦による大日本帝国の崩壊後、〈青年〉は、「新日本建設」の主体として新たに呼び出されることとなった。そこで以前と大きく変わったのは、従来の女性を排除したホモソーシャル集団が成り立たなくなったことである。占領期の男女同権政策の下で女性参政権が付与され女性も国家を担う自覚をもつことが推奨されるようになると、〈青年〉は男子のみの特権ではなくなり、自ずと〈青年〉から男性性が薄れることとなる。

1950年代という時代に若者の間に広がったのは「サークル」であった。サークルでは、〈青年〉という呼びかけが消えたことが特徴的である。そこにあったのは、国家の建設というナショナルな大目標ではなく、自己の要求や興味を起点とし「人間性の回復」をめざす「ひとりひとり」の意識の高まりであり、重視されたのは個人と個人のつながりであった。ナショナルな意識の形成については改めて検証しなければならないが、女性との協働のなかで異質な原理に接し男性性を問い直す可能性が生まれたことにも注目したい。

1950年代前半に高揚したサークルは50年代後半には退潮に向かうが、ちょうどそれと入れ替わるように、石原慎太郎と大江健三郎という20代の芥川賞作家の華々しい登場に牽引される形で「〈青年〉の時代」が到来することになる。10代前半に終戦を迎えた彼らは「戦後」世代と呼ばれたが、彼らに共通していたのは、「戦後」を、既存の価値観や理念が過去のものとなった時代、「希望」を見いだせない時代ととらえ、その「絶望」の時代の中で生きざるを得ない〈青年〉を主人公として描いたことである。この「戦後」の〈青年〉は、旧世代の道徳や価値観との断絶を強調するように戦前の模範的〈青年〉とは大きな隔たりがある。だが、そこに暴力の衝動や性的身体によって強調される男性性や男性性の希求とともに、女性の他者化、強いミソジニーがあったことは無視できない。〈青年〉は、このような形で再定義、再喚起されることとなったのである。

1950年代半ばの時期における〈青年〉の再定義・再喚起の動きは、「55年体制」と高度経済成長によって特徴づけられる戦後国民国家再興過程と重なる。そのプロセスは、戦争に帰結した旧世代の価値観や理念を乗り越えるにあたって、個々人の人間性回復を目的としジェンダーの境界を超えた協働の可能性が探られていたサークルの時代が、〈青年〉と男性性が呼び起こされるナショナルな時代へと転換したことを示すものといえよう。新たに再定義された〈青年〉と男性性の問題は、「戦後体制」を再考する上で欠かせないと考えるが、そのさらなる検証は今後の課題としたい。

註

- (1)——ジョーン・W. スコット (荻野美穂訳)『ジェンダーと歴史学』平凡社, 1992年 [Joan Wallach Scott 1988 *Gender and Politics of History*, Columbia University Press, New York]『増補新版 ジェンダーと歴史学』平凡社ライブラリー, 2004年。
- (2)——ウーテ・フレーフェルト (田邊玲子訳)「ドイツにおける女性史とジェンダーの歴史学—発展過程・問題点・将来展望」『思想』898号, 1999年4月。
- (3)——ジョージ・L・モッセ (細谷実/小玉亮子/海妻径子訳)『男のイメージ—男性性の創造と近代社会』作品社, 2005年 [George L. Mosse, *The Image of Man: The Creation of Modern Masculinity*, Oxford University Press, 1996], 8頁。
- (4)——内田雅克『大日本帝国の「少年」と「男性性」—少年少女雑誌に見る「ウィークネス・フォビア」』明石書店, 2010年。
- (5)——藤野裕子『都市と暴動の民衆史—東京・1905-1923年』有志舎, 2015年。
- (6)——木村直恵『〈青年〉の誕生—明治日本における政治的実践の転換』新曜社, 1998年。
- (7)——多仁照廣『青年の世紀』同成社, 2003年。
- (8)——近年の教育史の分野では, 田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本—人間形成と教育の社会史』(東京大学出版会, 2016年), 和崎光太郎『明治の〈青年〉—立志・修養・煩悶』(ミネルヴァ書房, 2017年)などがある。
- (9)——前掲多仁, 2頁。
- (10)——前掲多仁, 29頁。
- (11)——前掲木村, 13頁。
- (12)——徳富蘇峰『三版 新日本之青年』1889 (明治20年) (『明治文学全集 34 徳富蘇峰集』筑摩書房, 1974年)。
- (13)——蘇峰 徳富猪一郎『大正の青年と帝国の前途』時事通信社, 1916 (大正5)年 (復刻版, 1965年)。
- (14)——同前, 2頁。
- (15)——同前, 378-381頁。
- (16)——山本瀧之助氏功労顕頌会『山本瀧之助全集』1931 (昭和6)年 (財団法人日本青年館『近代社会教育史料集成 2 復刻版 山本瀧之助全集』不二出版, 1985)。
- (17)——同前, 1頁。
- (18)——同前, 12-13頁。
- (19)——同前, 24-25頁。
- (20)——嘉悦孝子「男らしき男」『中学世界』第9巻2号, 1906年。
- (21)——拙稿「日露戦後における『青年』の主體的構築」『歴史評論』698号, 2008年 (拙著『近代日本の国民統合とジェンダー』日本経済評論社, 2014年, 第3章に再録)。
- (22)——文部大臣・小松原英太郎「青年団体は一国道義の中枢也」『斯民 青年号』5編2号, 1910年。
- (23)——『復刻版 大日本青年団史』不二出版, 1989年, 199頁 (原本は, 熊谷辰治郎『大日本青年団史』1942年)。
- (24)——拙稿「大正〈新時代〉の男性性—内務官僚・田子一民の男子教育論」『現代のエスプリ マスキュリニティ/男性性の歴史』446号, 2004年。
- (25)——藤野裕子『都市と暴動の民衆史—東京・1905-1923年』有志舎, 2015年。
- (26)——地方「青年党」団体による名望家秩序の変革については, 拙稿「地方都市における『大正デモクラシー』—埼玉県川越「公友会」の活動をめぐって」『歴史学研究』604号, 1990年。
- (27)——この時期の〈農村青年〉運動については, 拙稿「戦間期における『農村青年』運動」田崎宣義編著『近代日本の都市と農村—激動の1910-50年代』青弓社, 2012年。
- (28)——『改造』第5巻9号, 1923年。
- (29)——同上。
- (30)——北河賢三『戦後の出発—文化運動・青年団・未亡人』青木書店, 2000年, 66-68頁。
- (31)——『青年団ハンドブック』日本青年館, 1949年, 4頁。
- (32)——『新生タマセイネン』1号, 1946年5月 (『多摩村青年団の記録 パルテノン多摩資料叢書 第4集』多摩市文化振興財団, 2008年)。
- (33)——朝倉治助「青年の発足」同前。
- (34)——『青年今ぞ起つ—山形県青年団弁論集』民主山形社, 1946年。
- (35)——同前, 1頁。
- (36)——同前, 5頁。
- (37)——森谷シエ「いざ振はむ建設の鉄を」同前『青年今ぞ起つ』35頁。
- (38)——前述の多摩村青年団の例では, 団長男女各一名 顧問若干名 副団長男女各二名 常任理事男女各三名となっていた (出典は註32)。
- (39)——安田常雄編『シリーズ戦後日本社会の歴史 3 社会を問う人びと—運動のなかの個と共同性』(岩波書店, 2012年), 宇野田尚哉ほか編『「サークルの時代」を読む—戦後文化運動研究への招待』(影書房, 2016年), 道場親信『下丸子文化集団とその時代—1950年代サークル

文化運動の光芒』（みすず書房、2016年）など

(40)——西川祐子「サークル運動再考—鶴見和子文庫から」前掲安田編『シリーズ戦後日本社会の歴史3 社会を問う人びと』、53頁。

(41)——サークルの文集をまとめたものとして、木下順二・鶴見和子編『母の歴史—日本の女の一生』（河出新書、1954年）、鶴見和子編『エンピツをにぎる主婦』（毎日新聞社、1954年）等がある。

(42)——『知性』第2巻11号、1955年。

(43)——清水幾太郎「サークル活動は何をつくりだすか」『知性』同前。

(44)——「集団対談 都会の仲間たちへ、農村の仲間たちへ」『知性』同前。

(45)——「座談会 私たちは自分自身を変革する—銀行員のサークル活動」『知性』同前。

(46)——谷川雁「森崎和江への手紙」『母音』23冊 1955年（谷川雁『原点が存在する』現代思潮社、1963年に収録）。

(47)——谷川雁「女たちの新しい夜」『サークル村』1958年11号（谷川雁『工作者宣言』現代思潮社、1963年に所収、岩崎稔・米谷匡史編『谷川雁セレクションI 工作者の論理と背理』日本経済評論社、2009年に再録）

(48)——同前、『谷川雁セレクションI 工作者の論理と背理』314-315頁。

(49)——後に森崎は、『サークル村』をめぐる谷川と自分との違いや対立について、中島岳志のインタビューに答えて語っているが、そこではっきりと「彼はほんとうにもう日

本の男でしたね」と皮肉を込めて語っている（森崎和江・中島岳志『日本断層論—社会の矛盾を生きるために』NHK出版新書、2011年、100頁）。

(50)——石原慎太郎「現代青年のエネルギー」『婦人公論』第42巻11号、1957年。

(51)——大江健三郎『われらの時代』中央公論社、1959年（新潮文庫版は1963年刊）。

(52)——同前（新潮文庫版）6頁。

(53)——同前（新潮文庫版）93頁。

(54)——同前（新潮文庫版）151頁。

(55)——「『若い日本の会』ひらく」『読売新聞』1960年6月1日。

(56)——「若い日本の会」と江藤淳・大江健三郎のかかわりについては、服部訓和「『若い日本の会』と青年の（不）自由—江藤淳と大江健三郎」『稿本近代文学』（筑波大学日本文学会近代部会）第32集（2007年）に詳しい。同論文で服部は、「若い日本の会」を「青年という主体の登場」ととらえながら、その結節点は「青年の（不）自由」にあるとされ、むしろ「主体の困難な在り様を照らし出して」いるとしている。だが、その後の本格的な「戦後」の歴史過程を視野に入れながら、「青年という主体」自体の意味や問題を考える必要があるのではないだろうか。

(57)——大江健三郎「戦後青年の日本復帰」『中央公論』75巻10号、1960年。

(58)——石原慎太郎「参議院に立候補する私の未来計画 青年の国をつくろう」『現代』1巻11号、1967年。

（横浜国立大学教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2021年3月16日受付、2021年11月26日審査終了）